（保護者による）こどもへの関わり（「しない」割合）

- 一般層に比べ**困窮層**では、
  一緒に遊んだり体を動かしたり、ニュースなど社会の出来事の話をすること等の
  こどもとのコミュニケーションの機会が**少ない**傾向。

※「ほぼ<u>しない</u>」割合　＜小学生＞
⇒高いほどネガティブ

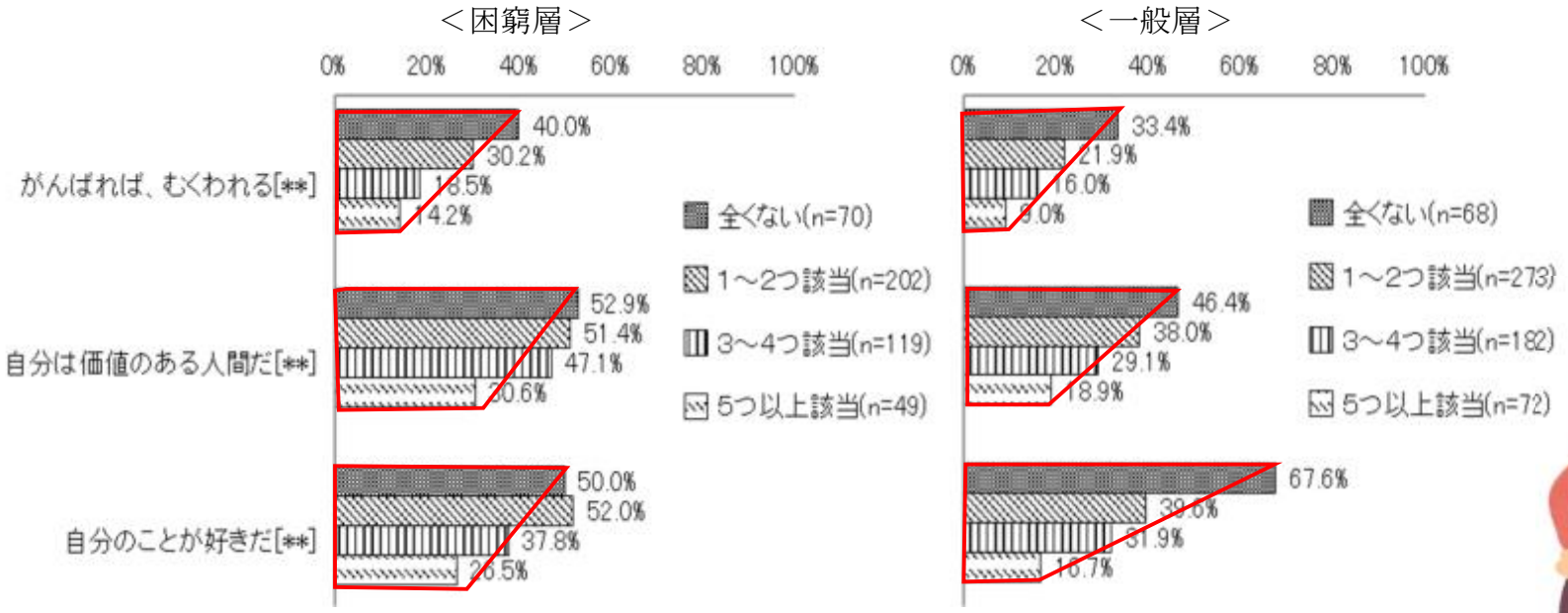
＜中学生＞

【+α】保護者の関わりとこどもの自己肯定感

- 困窮層であっても**「保護者によるこどもへの関わり」**が**多いほど**、
  「こどもの自己肯定感」が**高い**(ネガティブな回答が少ない)傾向。

下記の質問項目について**「ほぼ毎日」**又は**「週に３～４回」**を選択した項目の**該当数**に応じ４分類(①全くない、②１～２つ該当、③３～４つ該当、④５つ以上該当)して集計。

【質問項目】お子さんと次のようなことをどの程度していますか。└多いほど「保護者との関わり」が多いと仮定
Ａ.一緒に朝食をたべる、Ｂ.一緒に夕食を食べる、Ｃ.勉強をみてあげる、
Ｄ.一緒に遊んだり体を動かしたりする、Ｅ.学校生活の話をする、
Ｆ.ニュースなどの社会の出来事について話す、Ｇ.一緒に料理をする、Ｈ.一緒に外出する



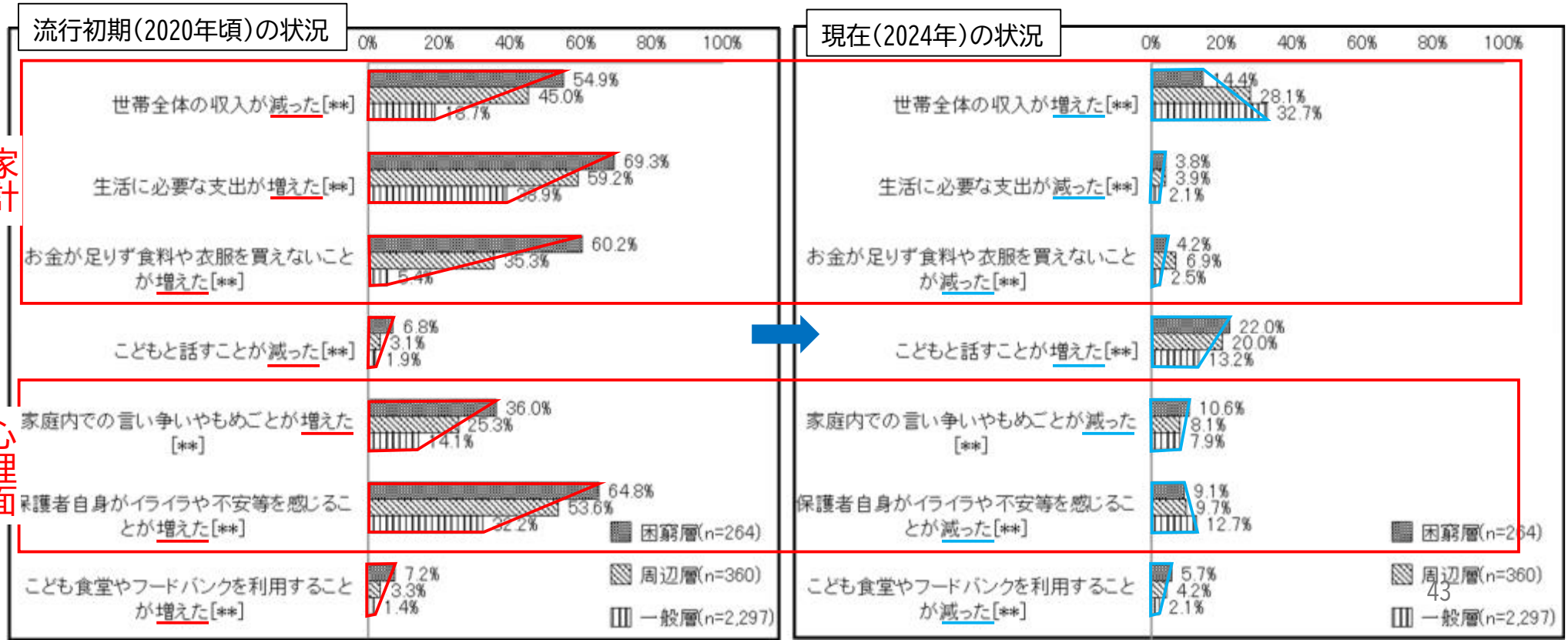
※「そう思わない」の割合⇒高いほどネガティブ ⇒低いほどポジティブ

（保護者）
新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症流行による生活の変化について、

- 一般層に比べ**困窮層**では、**流行初期**(2020年頃)に**家計**や**心理面**での**悪化**が著しかった。
  さらに、これらが**「現在は改善」**とする割合は**いずれも少ない。**

  ⇒特に**困窮層**において**影響が依然続いている**可能性がある。

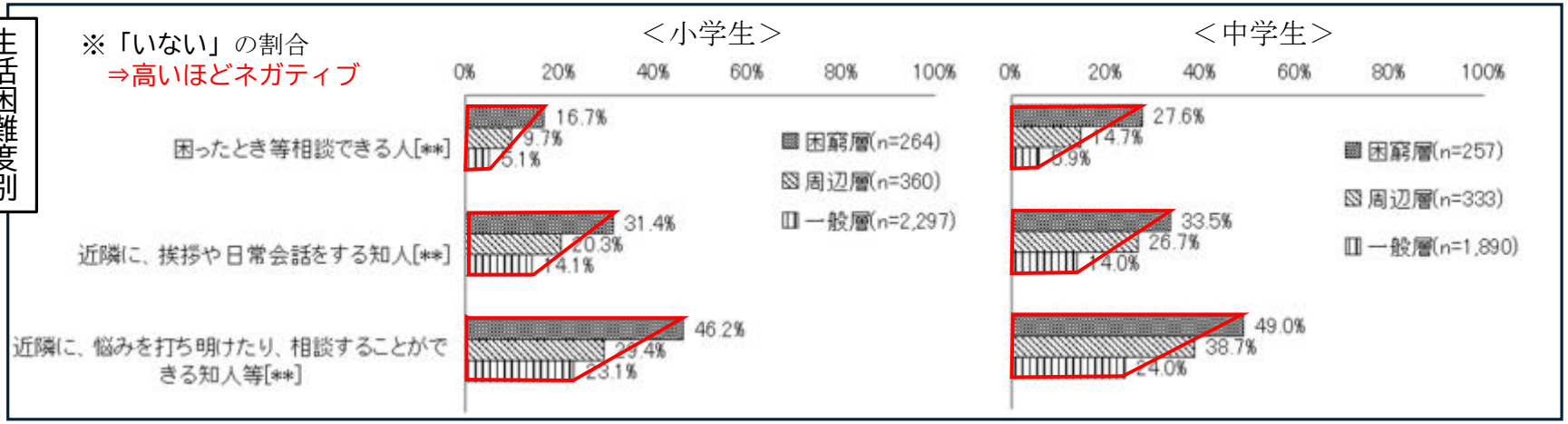


（保護者が）
困ったとき等に相談できる人の有無

- 一般層に比べ**困窮層**、ふたり親世帯に比べ**ひとり親世帯**において、保護者が**相談できる相手**の**いない**割合が高い。

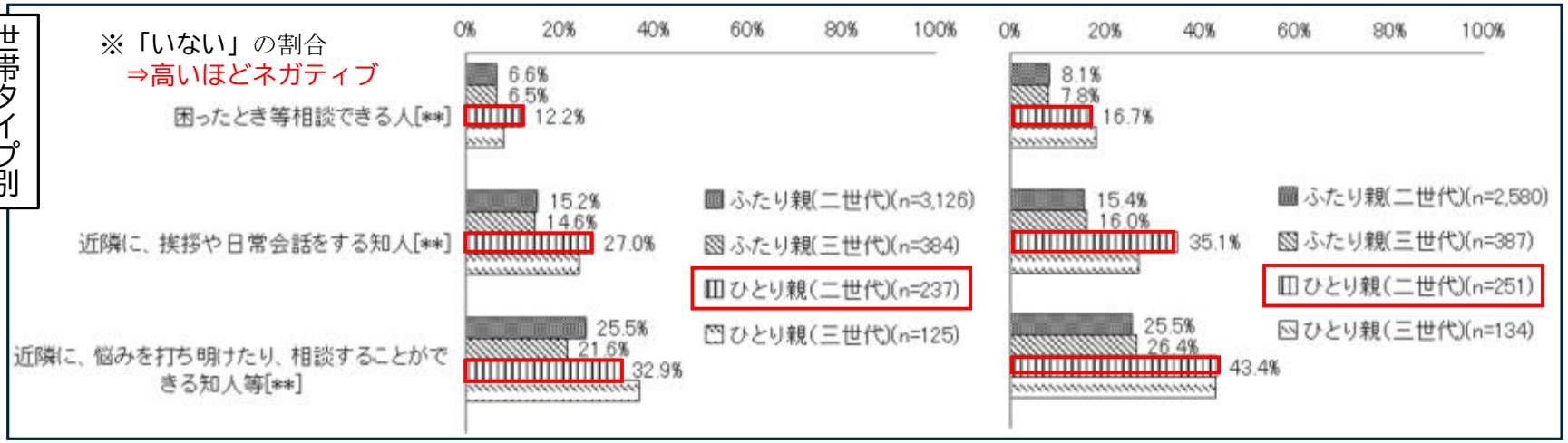
生活困難度別

※「いない」の割合
⇒高いほどネガティブ



世帯タイプ別

※「いない」の割合
⇒高いほどネガティブ



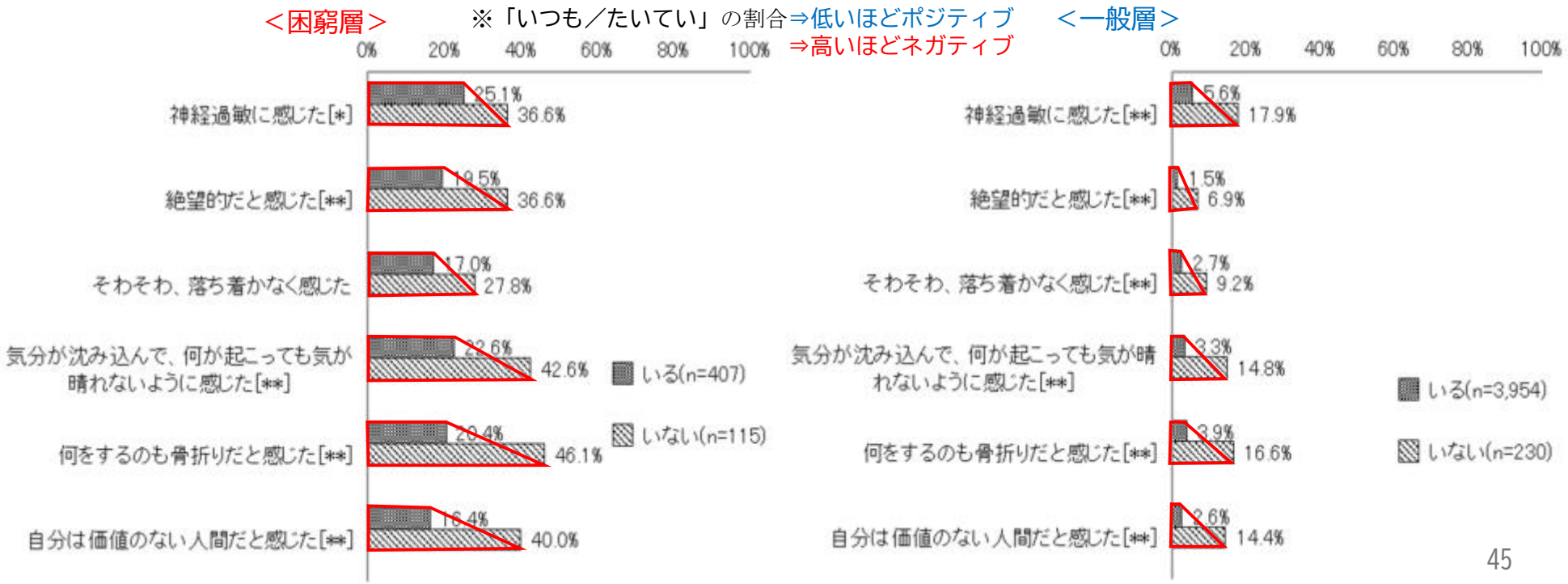
（保護者の）【+α】相談相手の有無と心の状態

- 困窮層であっても、

  相談相手のいる保護者の方が、**心の不調**が**少ない**傾向。

  ⇔「心が良好（前向き）なため相談できる」（因果関係が逆）という可能性もある。

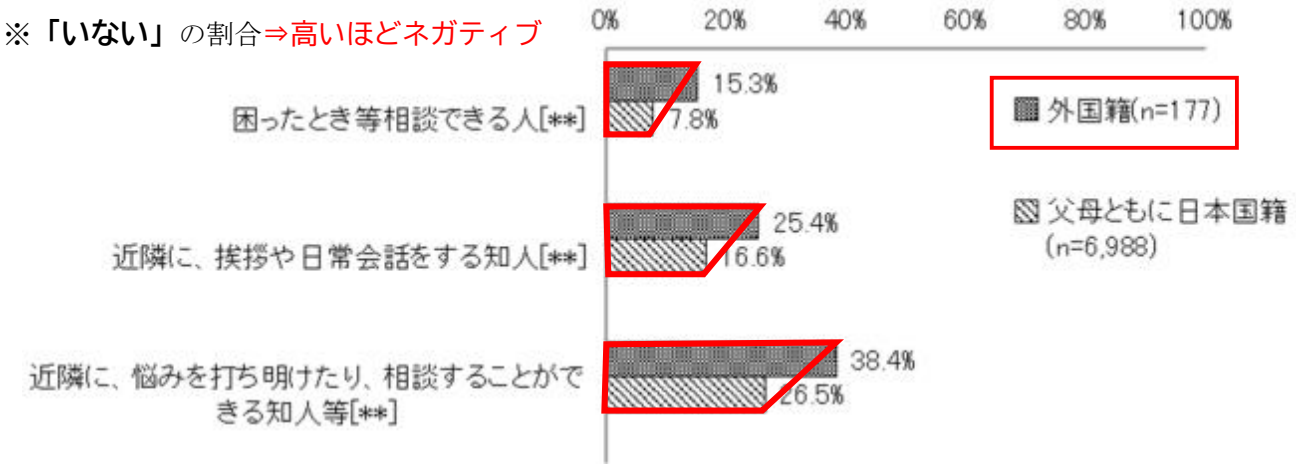
「困ったとき等に相談できる人」の有無別に、「心の健康状態」に関する設問とのクロス集計を実施。



（保護者が）
【+α】困ったとき等に相談できる人の有無（保護者国籍別）

- 保護者が**外国籍**の場合、保護者が**相談できる相手**の**いない**割合が高い。

※「いない」の割合⇒高いほどネガティブ



両親の学歴（最後に卒業した学校）

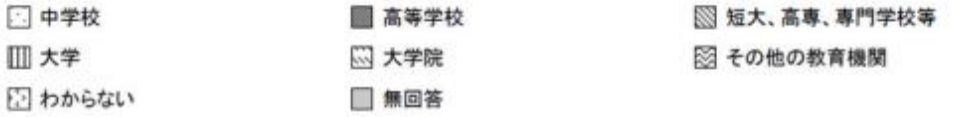
- 保護者が最後に卒業した学校を見ると、母親・父親ともに、
  一般層に比べ**困窮層**では**「中学校／高等学校」**の割合が**高く**、
  「大学／大学院」の割合が**低い**。

※全ての層において、**父親**の方が**「大学／大学院」**の割合が**高い**。

母　親

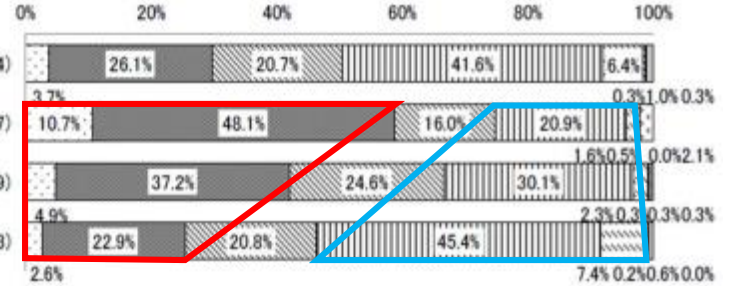
<小学生>（p<.01）

<中学生>（p<.01）

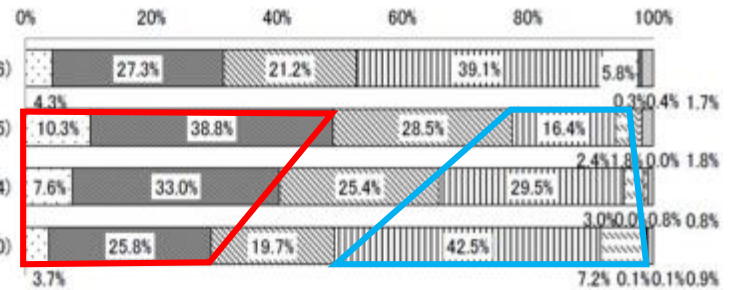


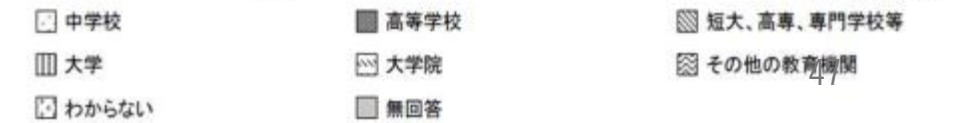
父　親

<小学生>（p<.01）



<中学生>（p<.01）

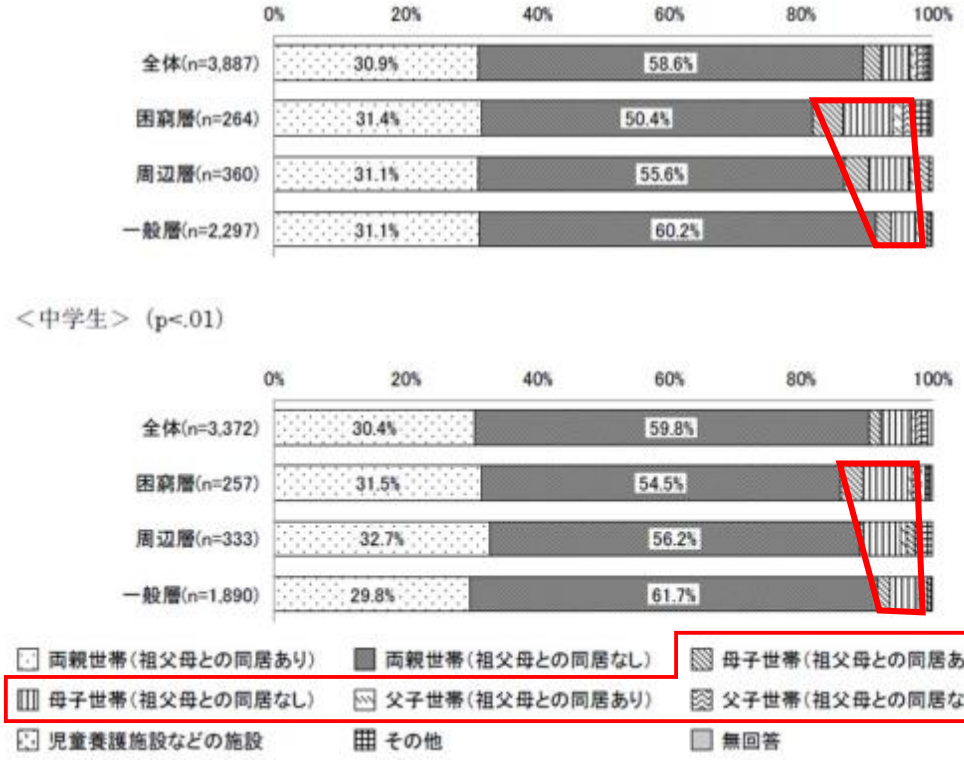




（保護者が）15歳の頃の「世帯タイプ」

- 保護者が15歳の頃（こども期）の世帯タイプは、
  全ての層において「両親世帯（**ふたり親世帯**）」が**大半**。
  ※**困窮層**ほど（保護者自身がこどもの時に）**ひとり親世帯**の割合が**やや高い**。
  （ただし有意差は不明）

＜小学生＞（検定不可）



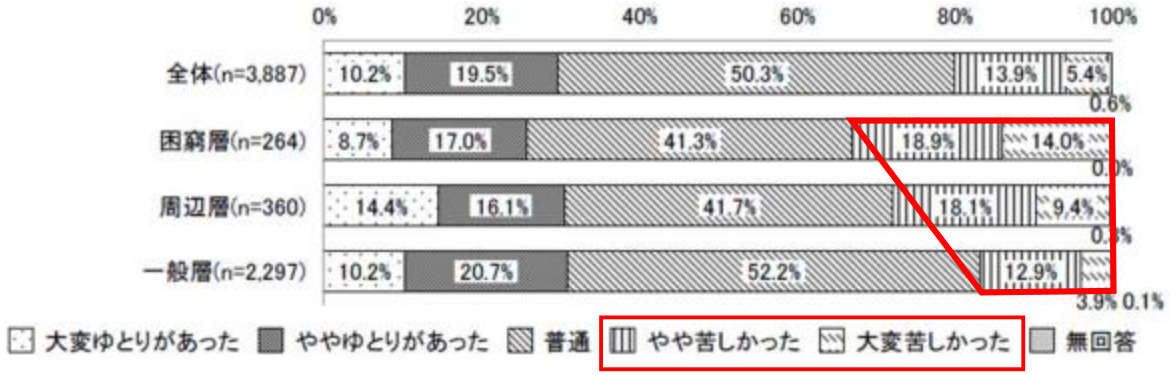
- 世帯タイプ別に見ると、中学生のいる世帯では、
  「（現在）**ひとり親世帯**」において、
  「（保護者がこどもの時に）**ひとり親世帯**であった」
  割合がやや高い。

＜中学生＞（p<.01）　※小学生は有意差なし

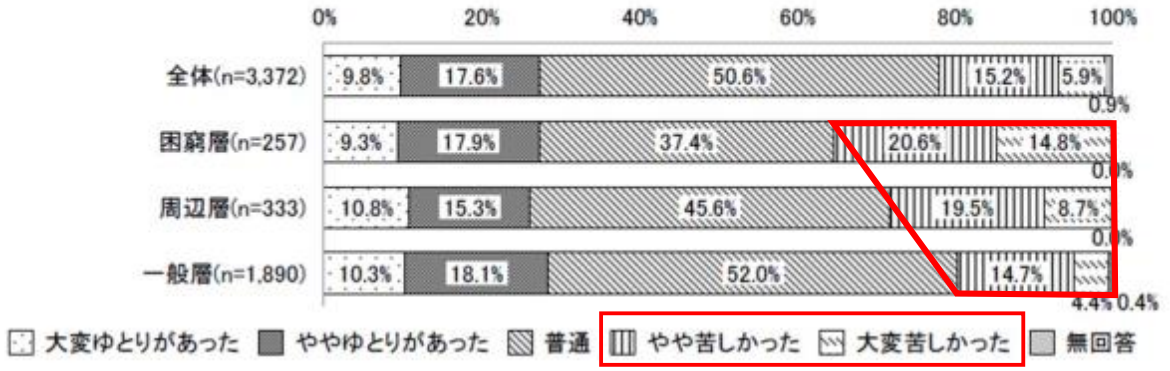
（保護者が）15歳の頃の「家庭の暮らし向き」

- 保護者が15歳の頃（こども期）の家庭の暮らし向きは、
  一般層に比べ**困窮層**において**「苦しかった」**とする割合が高い。
  ⇒貧困は**「世代を超えて連鎖する」**可能性

＜小学生＞（p<.01）



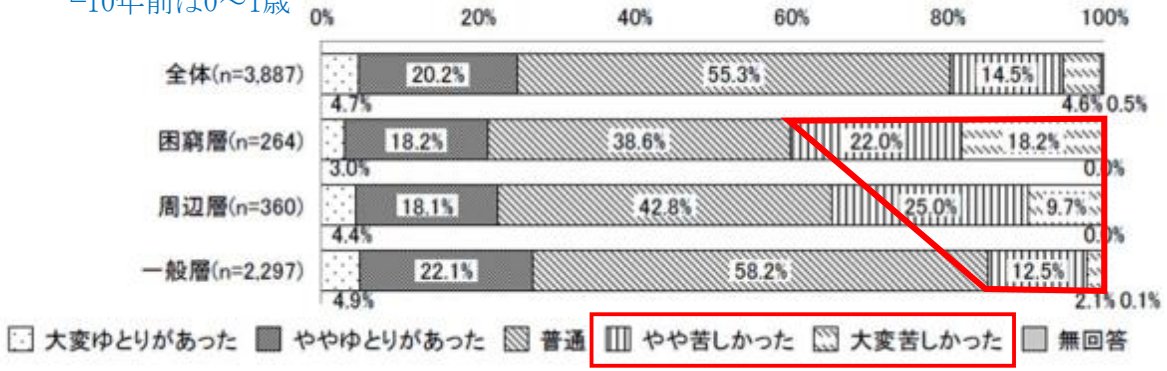
＜中学生＞（p<.01）



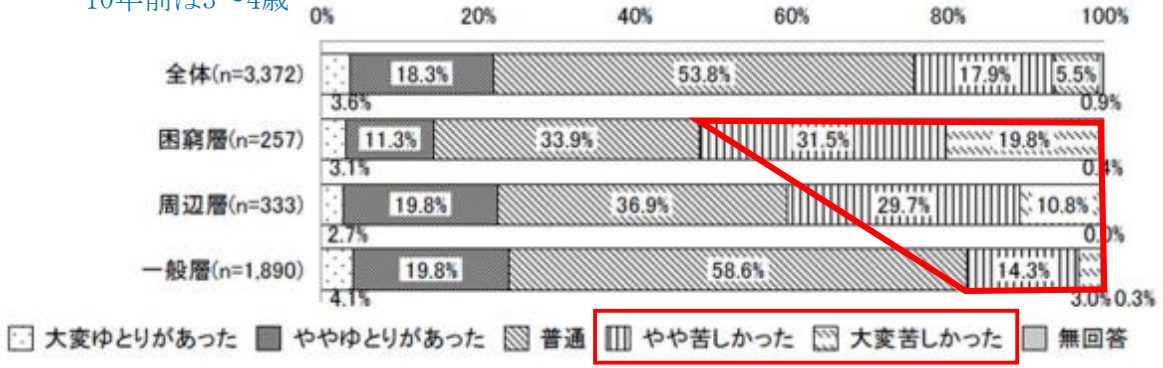
10年前の「家庭の暮らし向き」

- 今から10年前（**こどもが乳幼児期**）の家庭の暮らし向きは、
  一般層に比べ**困窮層**において**「苦しかった」**とする割合が高い。
  ⇒貧困は**「継続する（脱却が難しい）」**可能性

＜小学生＞（p<.01）
└10年前は0～1歳



＜中学生＞（p<.01）
└10年前は3～4歳



【+α】貧困の継続状況別分析①（相談相手）

貧困の継続状況によって、保護者やこどもの置かれた状況・課題が異なるかを分析するため、
「10年前の暮らし向き」の回答をもとに４区分を作成。

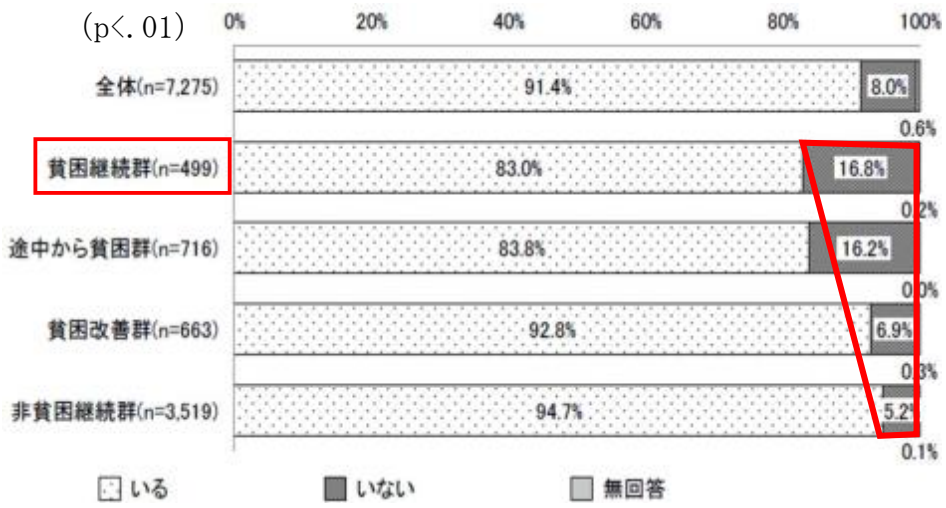
① 貧困継続群　（現在：困窮層・周辺層／10年前：苦しかった）
② 途中から貧困群（現在：困窮層・周辺層／10年前：ゆとりがあった・普通）
③ 貧困改善群　（現在：一般層　／10年前：苦しかった）
④ 非貧困継続群　（現在：一般層　／10年前：ゆとりがあった・普通）

「やや～」「大変～」を含む

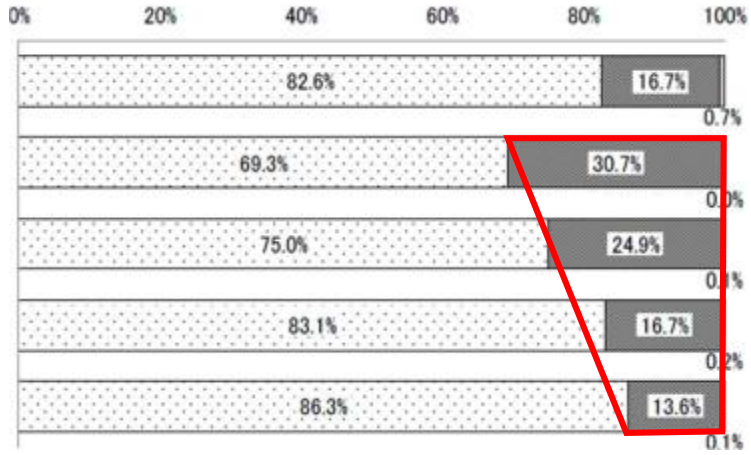
- 貧困が**継続しているほど**、保護者が**相談できる相手のいない**割合が高い。

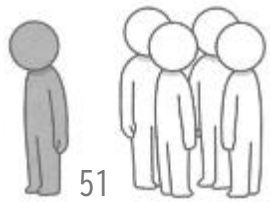
⇒貧困が継続している世帯ほど、**悩みを抱え込んでいる**可能性

（困ったとき等相談できる人）



（近隣に、挨拶や日常会話をする知人）



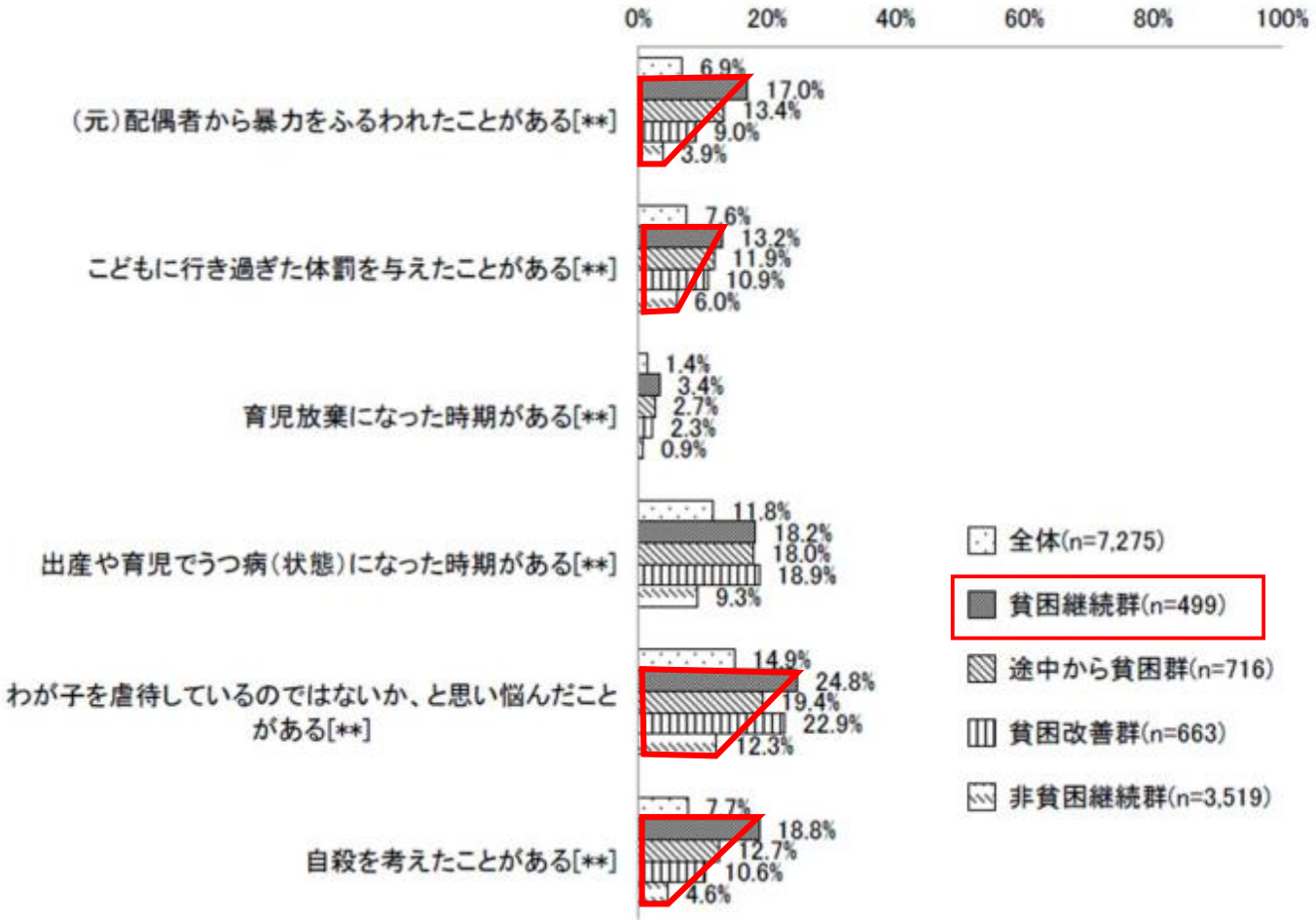


【+α】貧困の継続状況別分析②（困難な経験）

- 貧困状態が継続しているほど、

  「ＤＶ」「虐待傾向」「自殺念慮」等を経験した割合が高い。

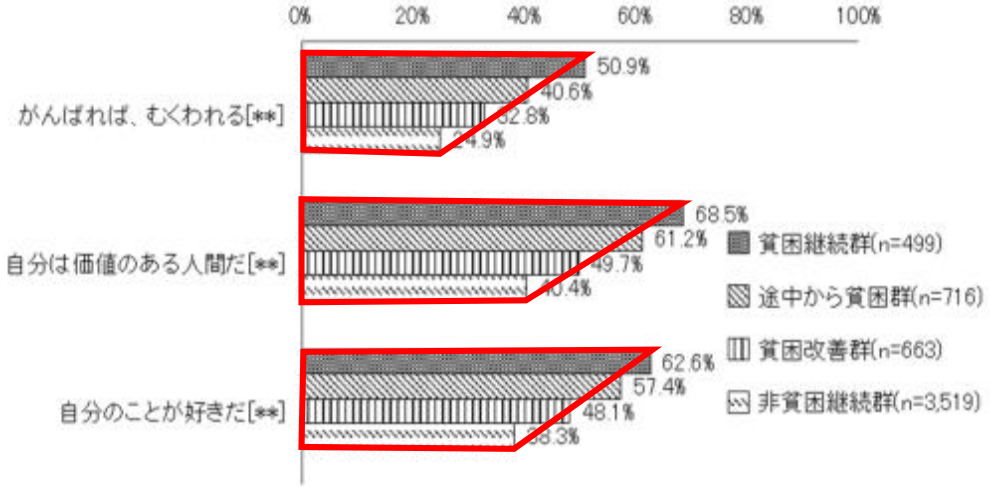
  ⇒貧困の継続が**家庭に深刻な影響**を与えている可能性



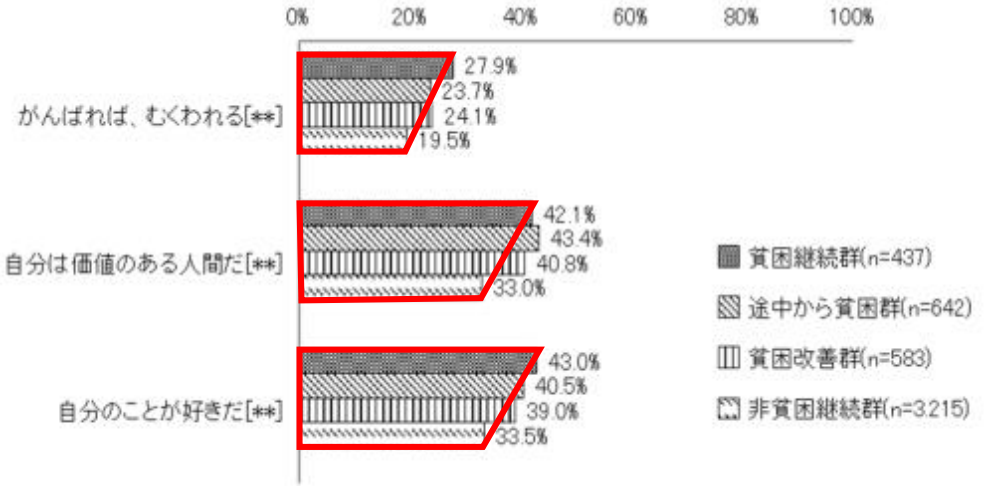
【+α】貧困の継続状況別分析③（自己肯定感）

- 貧困状態が継続しているほど、
  保護者・こどもとも**に自己肯定感**が**低い。**

（保 護 者）



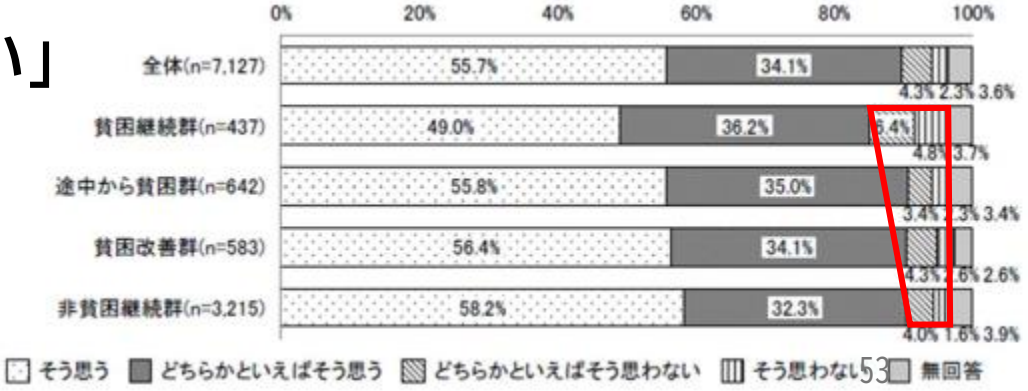
（こ ど も）



- 貧困状態が継続しているほど、
  こどもが**「将来のために今頑張りたい」**
  と**「思わない」**割合が高い。

⇒貧困の継続がこどもの**前向きな気持ち**にも
影響を及ぼしている可能性

将来のために今頑張りたいと思うか

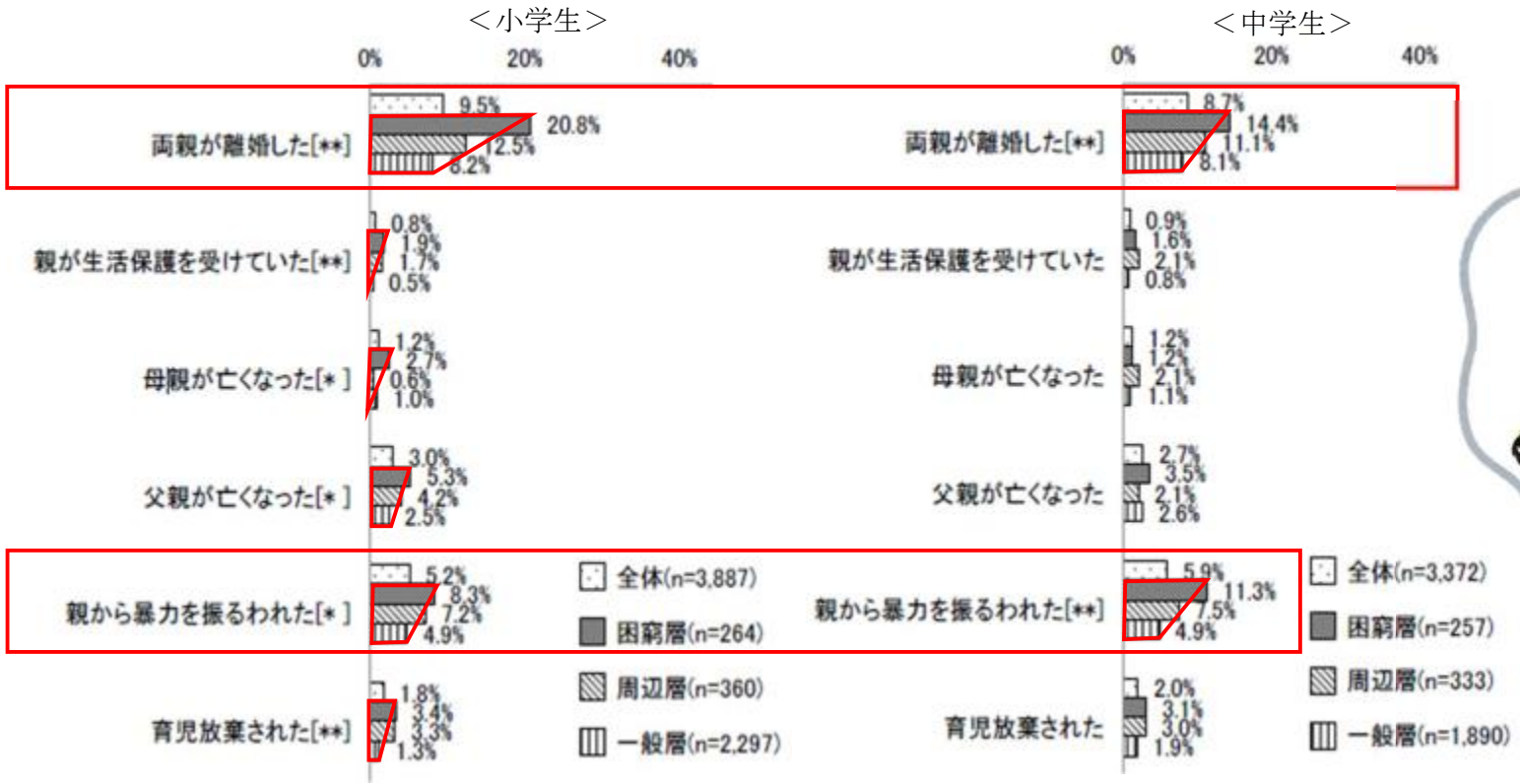


（保護者が）
成人する前に体験したこと（逆境経験）

- 一般層に比べ**困窮層**では、

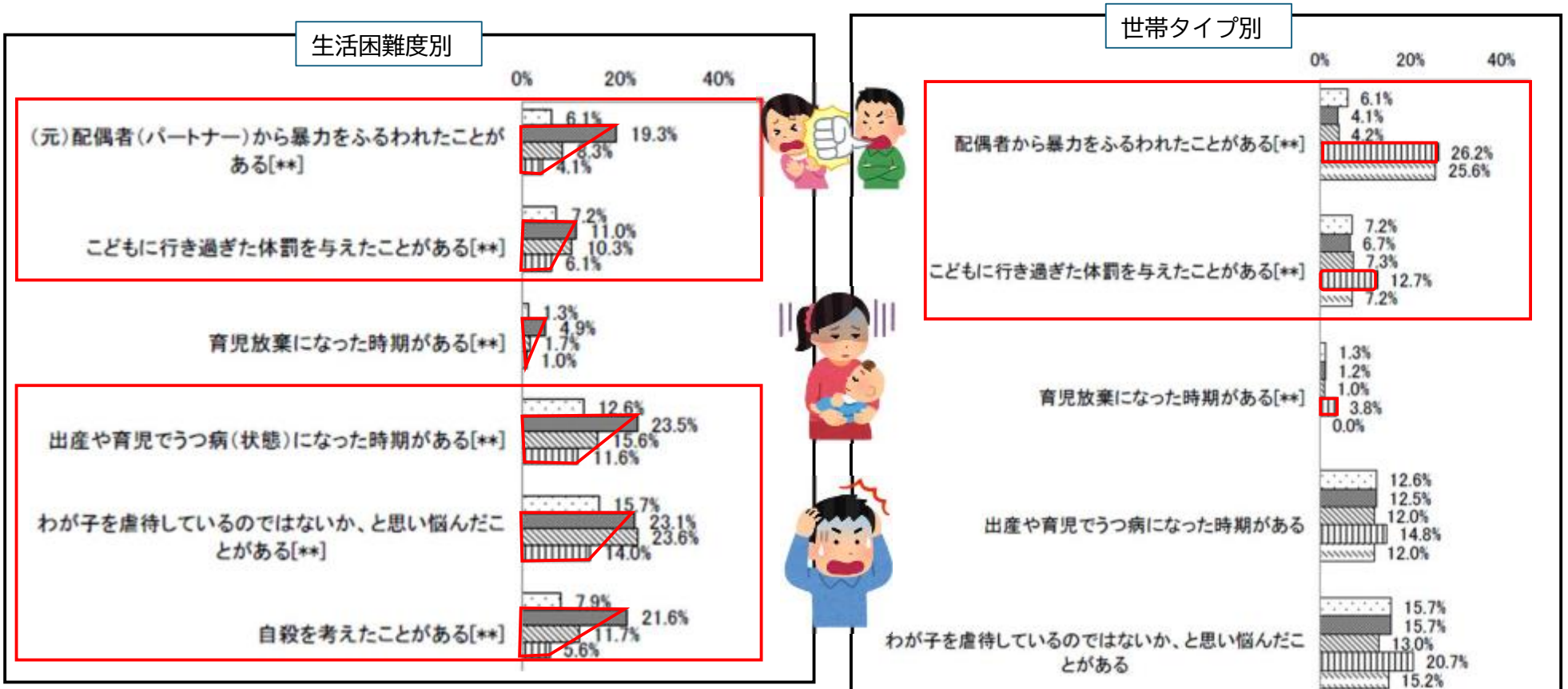
  保護者が成人する前に**「両親の離婚」**や**「親からの暴力」**を経験した割合が高い。

  ⇒自身の逆境経験が、**その後**(大人になってから)**の生活**に**影響を及ぼしている**可能性



(保護者が)こどもを持ってから経験したこと

- 一般層に比べ**困窮層**では、
  こどもを持ってから、**ＤＶ、虐待傾向、うつ状態、自殺念慮** 等を経験した割合が高い。
  ⇒貧困が様々な面で**深刻な影響を及ぼしている**可能性

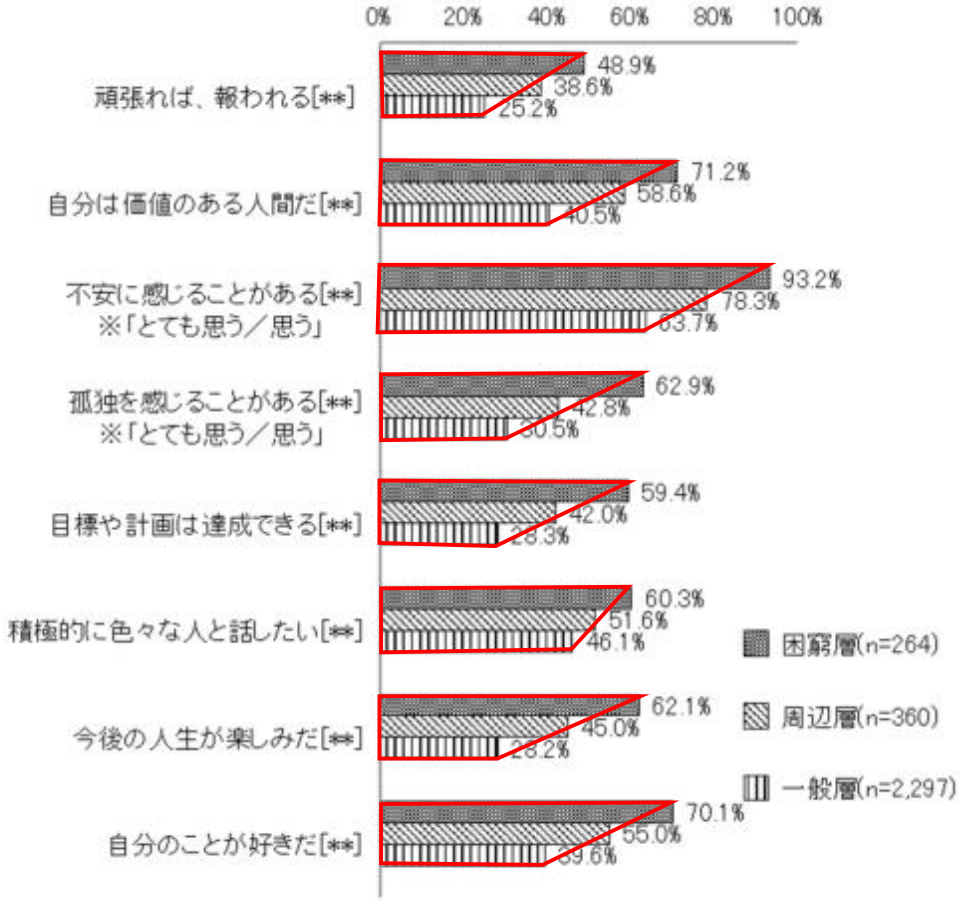


- ふたり親世帯に比べ**ひとり親世帯**では、
  特に**ＤＶ、虐待傾向、自殺念慮**の経験が高い。

（保護者の）自己肯定感

- 一般層に比べ**困窮層**では、保護者の**自己肯定感**が**低い。**

＜小学生＞
※「思わない／あまり思わない」の割合（一部を除く）
⇒高いほどネガティブ

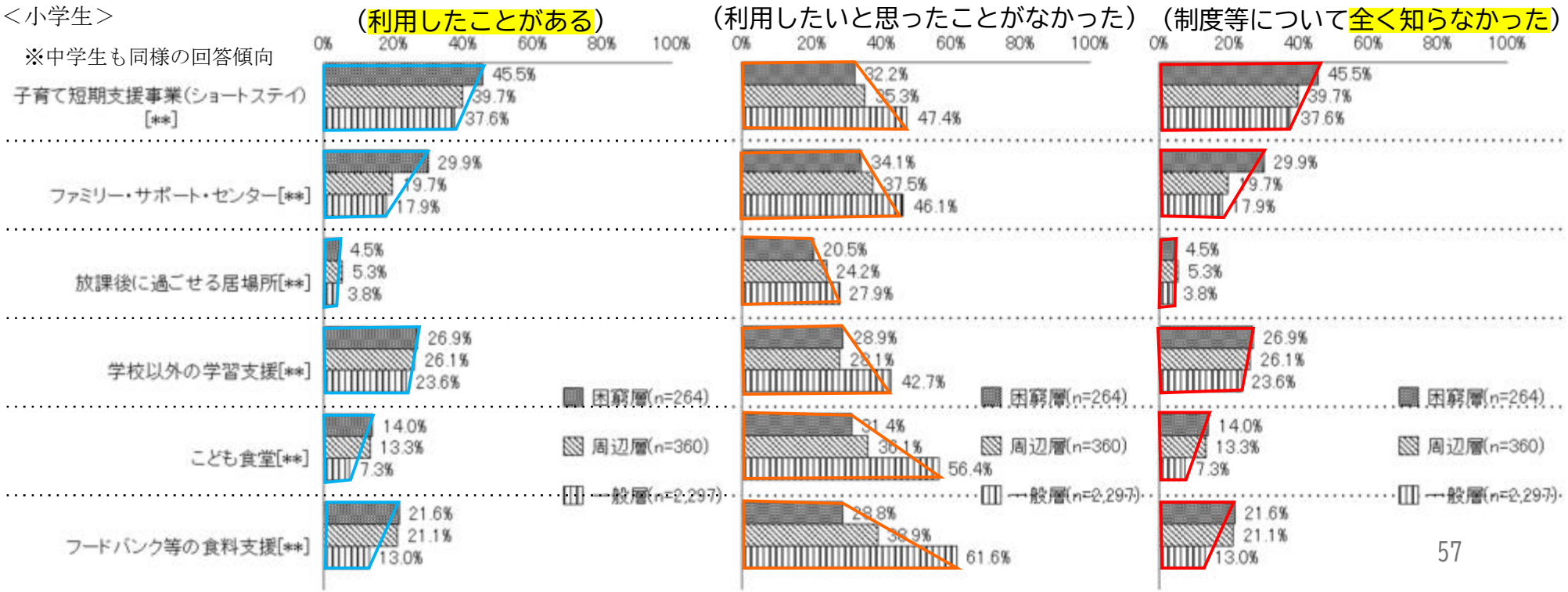


支援の利用状況（子育て支援サービス、民間取組など）

- 行政や民間による子育て支援サービス等の利用状況について、
  一般層に比べ**困窮層**の方が
  - **「利用したことがある」**割合が高い
  - 一方で**「制度等について全く知らなかった割合」**割合も高い

⇒困窮層ほど**ニーズが高い**ものの、制度が十分に**認知されていない**可能性

＜小学生＞
※中学生も同様の回答傾向



支援の利用意向（子育て支援サービス、民間取組など）

- 行政や民間による子育て支援サービス等の中で、

学習支援、こども食堂、フードバンクについて

「利用したことはないが**興味がある**」割合が高く、

小学生においては特に**困窮層・周辺層**で**関心が高い。**

※**中学生**では**フードバンクのみ**有意差あり

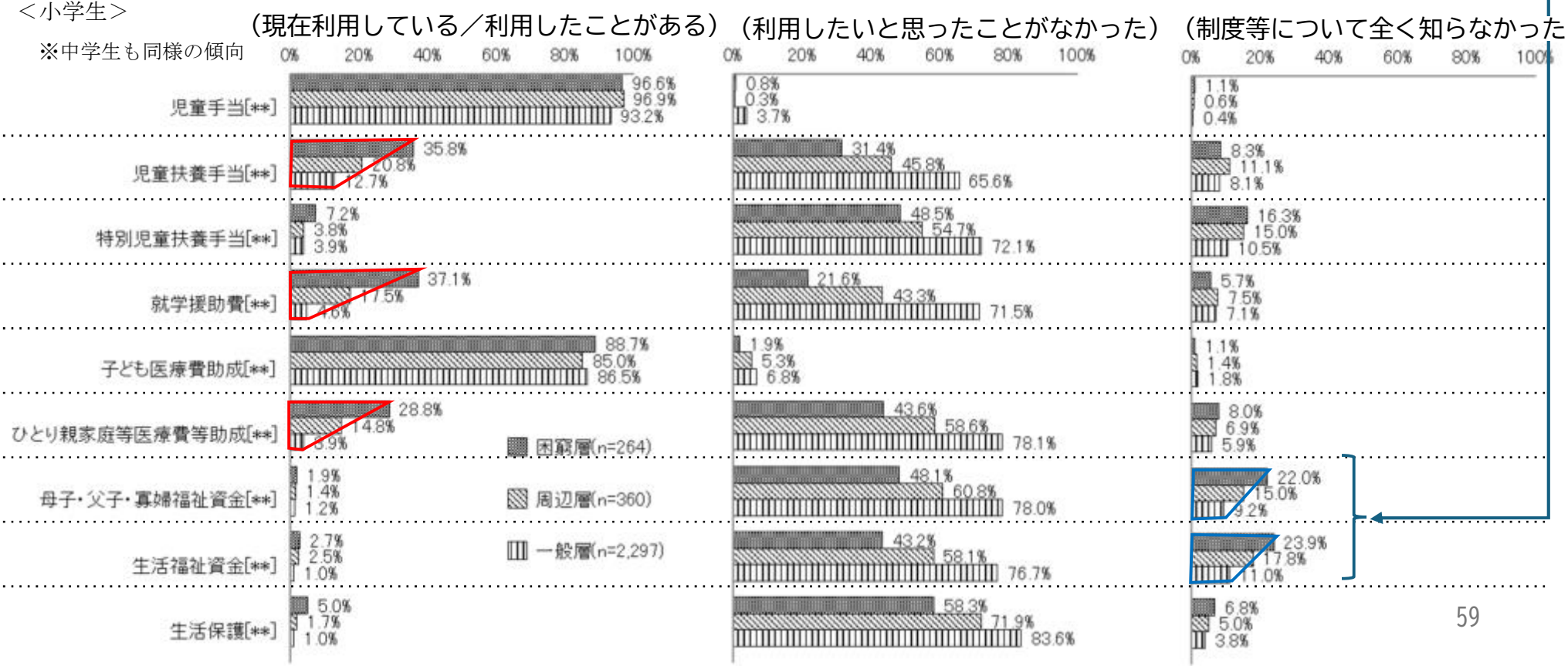
※「利用したことはないが興味がある」の割合

サンプル数はメニューにより異なる

支援の利用状況（経済的支援制度等）

- 経済的支援制度等の利用状況について、
  児童扶養手当、就学援助費、ひとり親家庭等医療費助成
  において一般層に比べ**困窮層**の利用率が**特に高い。**
- 一方で、**制度を知らなかった**割合も**困窮層**の方が高い。※特に「貸付制度」を知らない割合が顕著

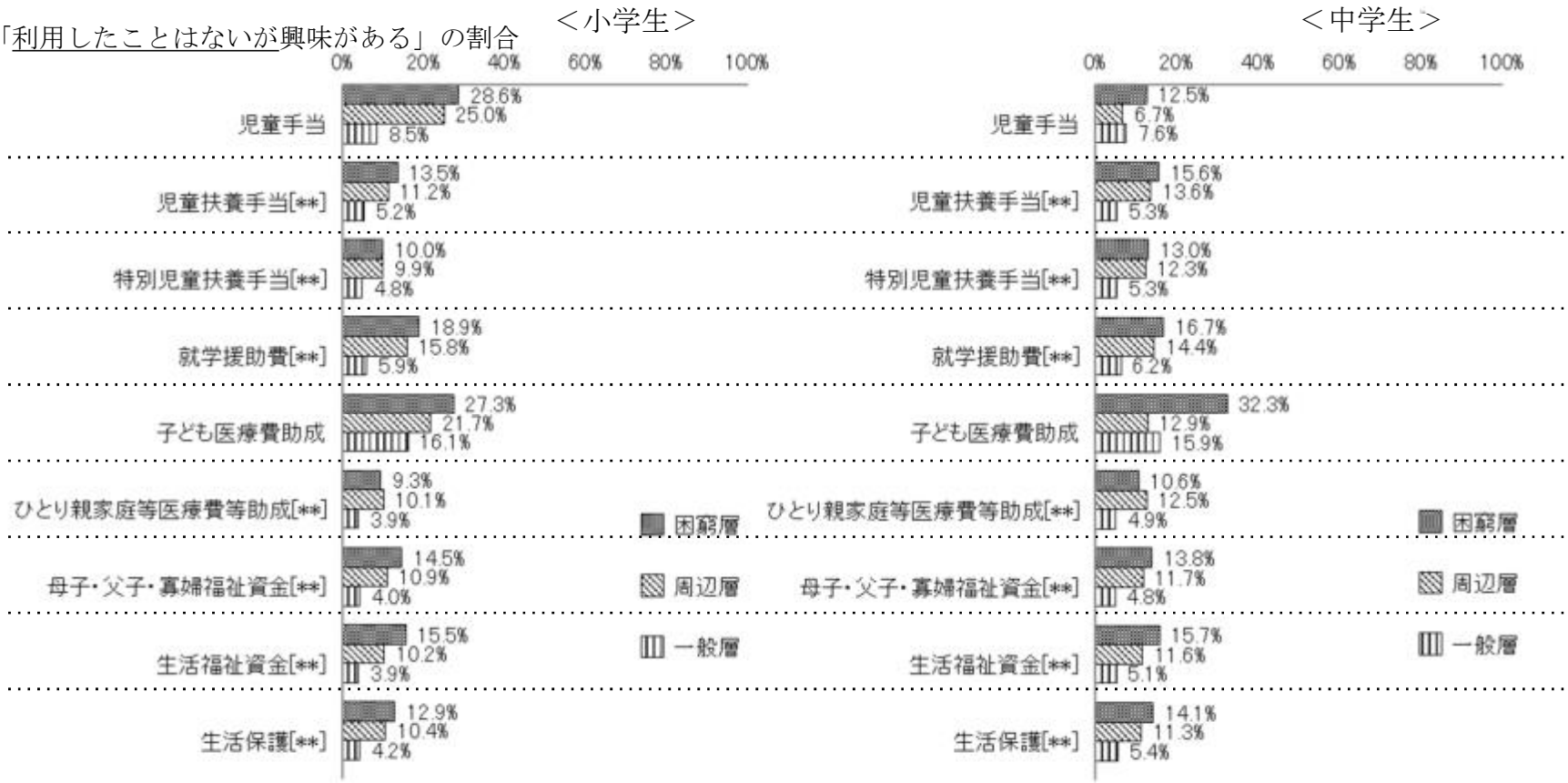
＜小学生＞
※中学生も同様の傾向



支援の利用意向（経済的支援制度等）

- 経済的支援制度等の利用意向は、
  全てのメニューで一般層に比べ**困窮層**において**関心が高い**。
- 一方で、**子育て支援サービス**に比べると、全体的に**関心が低い**。

※「利用したことはないが興味がある」の割合



サンプル数はメニューにより異なる